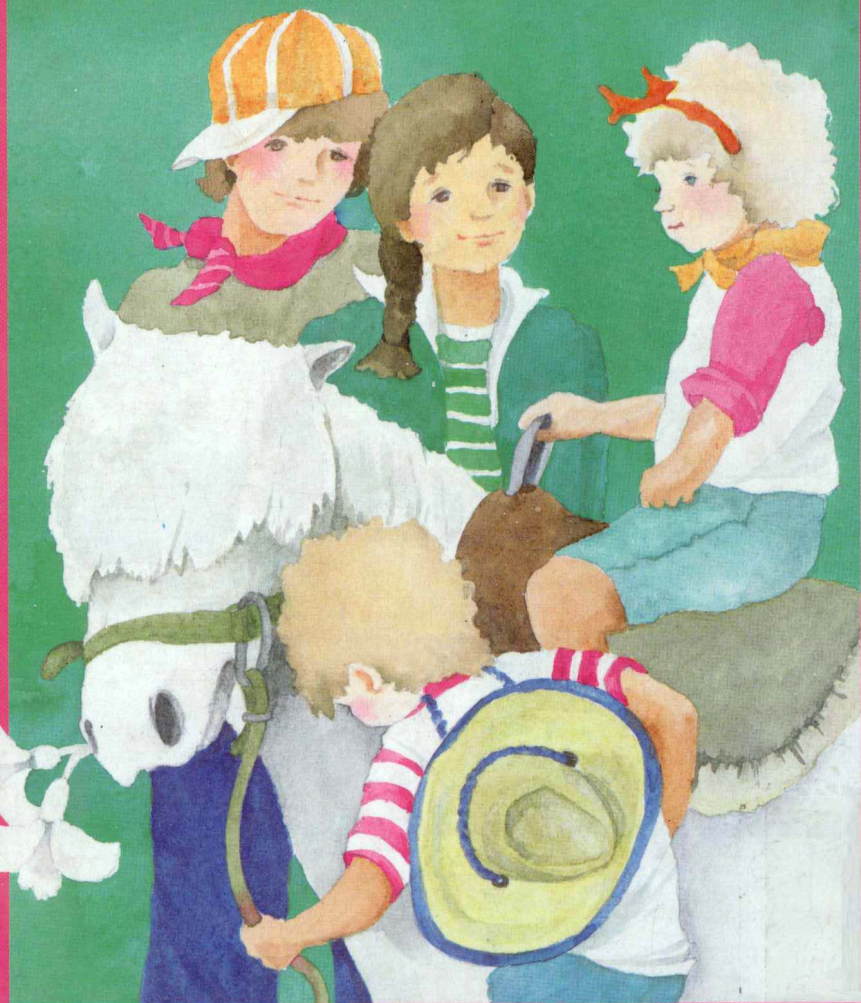


ボブシーきょうだい探偵団④

きえた小馬事件

ローラ・リー・ホープ 作 ト部千恵子 訳



933 ホープ，ローラ・リー

ボブシーきょうだい探偵団④
きえた小馬事件

うらべちえこ訳
佑学社 1983

150p 19cm

ボブシーきょうだい探偵団④
きえた小馬事件

1983年4月15日 第1刷発行

作 者 Laura Lee Hope

訳 者 ^{うら}ト ^べ部 ^ち千 ^え恵 ^こ子

発行所 株式会社 佑学社

代表者 三井数美

〒101 東京都千代田区猿樂町 2-3-1

電 話 東 京 291-6155~7

振 替 東 京 5-190823

印 刷 平 河 工 業 社

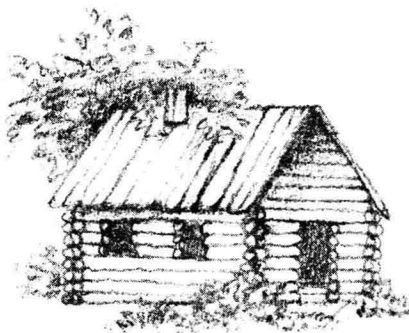
製 本 徳 住 製 本 所

定価680円

ボブシーきょうだい探偵団④

きえた小馬事件

ローラ・リー・ホープ 作
ト部千恵子 訳



佑学社

もくじ

1 カップケーキがきえた

6

2 残^{のこ}されたタイヤのあと

17

3 おかしな手紙

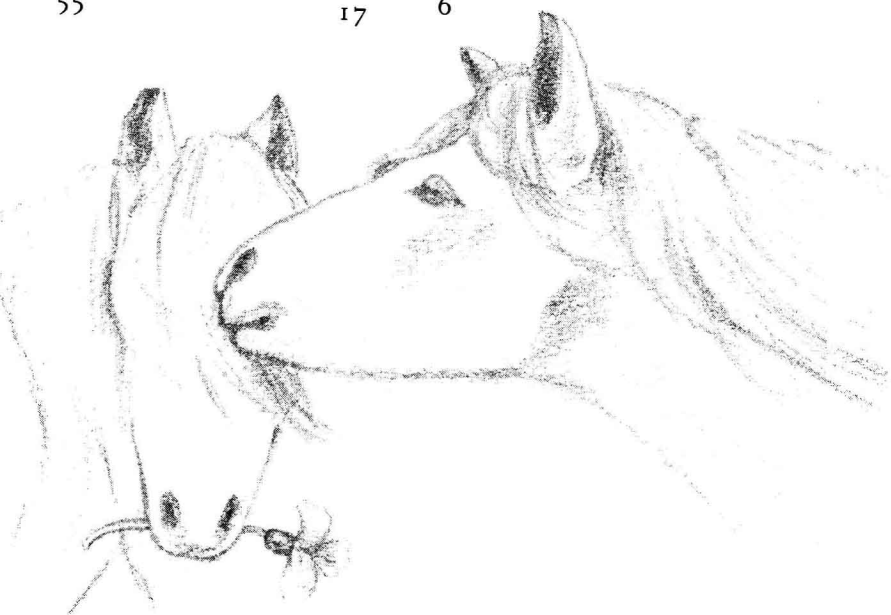
27

4 待ちぶせ

42

5 オート麦^{むぎ}どろぼう

55



6 犯人^{はんにん}をおえ

64

7 セっけん騒動^{そうどう}

73

8 ピザ・パイの塔^{とう}

84

9 かくれが発見

97

10 鉄のとびら

112

11 川岸通りのガレージ

122

12 よろこびの歌

144

さし絵

菊池勝子

The Bobbsey Twins 4
The Missing Pony Mystery by Laura Lee Hope

Copyright©1981 by Stratemeyer Sybdicate
Published in Japan by Yugaku-sha, Ltd., Tokyo
Japanese translation rights arranged with
the original publisher, Wanderer Books, New York
through Japan UNI Agency, Inc.

おもな登場人物

 ナナ 12歳 しっかりもののお姉さん	 ハート 12歳 ハンサムでたよりになる
 フレディ 6歳 やんちゃぼうず	 フロシー 6歳 泣き虫でおしゃまさん

1 カップケーキがきえた

ナン・ボブシーは、受話器じゆわきをにぎりしめて、友だちのネリー・パークスの話をきいていました。よつぽどわくわくするような話らしく、目をかがやかせて、にっこりしています。二、三分たつて話がすむと、ナンは台所へスキップしていきました。

ボブシー家には、ふたごが二組さいいます。どちらも男の子と女の子の組み合わせで、上のふたりバートとナンは、十二歳、下のふたりフレディーとフロシーは、六歳です。台所では、おかあさんとバートが、サンドイッチをならべているところでした。年下のふたご、フレディーとフロシーは、レモネードをつくっていました。

「おかあさん、ネリーがおしえてくれたの。こんど、40チャンネルで、子ども芸能げいのうコ

ンテストをやるんですって。ネリーったら、わたしたち四人が歌えば、優勝ゆうしょうもゆめじやないっていうのよ！」

「へえ、おもしろそうだね！」バートがいました。

「とつても、すてき！ コンテストはいつ？」金色の巻き毛まげをゆすりながら、フロシーがききました。

「金曜の夜よ。練習れんしゅうするのに、あと一週間もないわね。そうそう、賞品しょうひんも出るっていう話だったわ」

「まあ、どんなものかしら？」おかあさんがききました。

「それがまだ、ひみつなの。コンテストの日まで、発表しないんですって」

「申込書もうしこみしょを出すんでしょう？」おかあさんがききました。

「ネリーはなんにもいっていなかったけど。あとで、テレビ局きょくにきいてみるわ」ナンがこたえました。

昼ごはんのあと、バートが腕時計を見ながらいました。

「そろそろ、乗馬クラブに行く時間だ」

ボブシーきょうだいは、馬が大スキなので、近くの乗馬クラブで、ちよつとした仕事をてつだつては、かわりにただで馬に乗らせてもらっているのです。毎週土曜日の午後になると、バートは馬の毛をくしですいてやりまし、ナンは小馬広場で、小さい子どもたちのめんどろをみてやります。フレディーとフロシーは、ふたりのてつだい役です。

みんなのお気に入りのは、シェットランド種の小馬で、カップケーキという名前です。

二組のふたごは、いっせいに外に出ると、ステーションワゴンに乗りこみました。おかあさんがハンドルをにぎり、車は乗馬クラブに向かって出発しました。

「あたし、カップケーキのこと、だーいすき」おかあさんのとなりになつたフロシ

ーがいました。「とっても、かっこいいんだもの」

「そうね。カップケーキは、ほんとうにかわいい小馬だわね」おかあさんがうなずきました。「それに、小馬というのは、とてもよく人になつくものなのよ。シェットランド種の小馬が、もうなん百年も前から、人に飼^かわれてきたっていうこと、知っている？」

「ふうん、どこで？」フレディーがわつてはいりました。

「スコットランドよ」

おかあさんは、馬のなかでいちばん小さいシェットランド種の小馬は、もともと、スコットランド北部のシェットランド^{しよとう}諸島にいたのだと説明^{せいい}しました。

「あのもじやもじやのたてがみには、雨や風から、小馬の目をまもる役目^{やくめ}があるの。ふさふさした毛は、レインコートがわりっていうところだわね」

車はわき道にはいっていき、まもなく、背^せの高い草におおわれた丘^{おか}のふもとにある、乗馬クラブにつきました。

乗馬じようばクラブには、小屋がふたつあります。大きいほうは、ふつうの馬がいる馬小屋、小さいほうは、小馬がいる小馬小屋です。それぞれの小屋の前に、さくでかこまれた場所——乗馬場と小馬広場——があつて、そのなかで馬に乗れるようになっていきます。乗馬クラブのおくきゆうしやめんのほうは、急斜面の丘おかで、その丘をのぼりきると、松林まつばやしにぶつかります。

二組のふたごは、うれしそうな声をあげながら、車をおりました。バートとフレディは馬小屋にかけこんでいくと、まず、あごひげをはやしている、やせた男の人のところへいきました。男の人は綿めんのシャツに乗馬ズボン、乗馬ぐつといういでたちでした。

「こんにちは、ウインク！ きょうはいそがしいですか？」バートが声をかけました。「ああ。なにしろ、これまでにない人出ひとでだからね」

ウインクのほんとうの名前は、コップ・ウインクラーというのですが、子どもたち

は友だちみたいに、ただウインクとよんでいます。ウインクは音楽がすきで、ときどき、バートにギターをおしえてくれます。

バートはさつそく、馬ぐしをとると、大きなめすの馬の手入れをはじめました。フレディーも馬がいる仕切りしきのひとつひとつへ、水を運んでいきました。

いっぽう、ナンとフロシーのふたりは、小馬小屋に走っていきました。そこには、この乗馬クラブの持ち主ぬし、ロックウェルさんがいました。ロックウェルさんは、でっぷりした男の人で、やさしい茶色ちやいろの目をしています。

「やあ、ナン。すぐに小馬広場へ行ってくれないか。おちびさんたちが三人、待ちかまえているんだ」

ナンは小屋にかけこみ、フロシーといっしょに三頭さんとうの小馬を外に出すと、小馬広場へいそぎました。フロシーがいちばん小さいカップケーキをつれていき、ナンはアカとペッパーを、いっぺんにひっぱっていきました。



ナンが、待ちかまえていた女の子ふたりと男の子ひとりを、小馬の背せなか中にのせてや
つてるとき、おかあさんが手をふりました。

「買物に行つてきますからね。あとでまた、むかえにくるわ」

それからの一時間というもの、ナンとフロシーは働はたらきどおしてしたが、やっと、じ
ゅんばん待ちの子どもがいなくなりました。こういうときこそ、ふたりが小馬に乗れ
るチャンスです。

「さあ、わたしたちの番よ」ナンがいました。

ナンはフロシーを、カップケーキの背中にのせてやりました。フロシーの青い目が、
うれしそうにかがやきました。

ナンがペツパーにまたがったときです。男の子がひとり、さくを乗りこえてやつて
きました。バートとおなじくらいの男の子ですが、もっと背が高く、ふとっています
し、ふきげんそうな顔をしています。その子はまゆをひそめてナンをにらむと、大声



でいいました。「おれも乗るぜ！」

ナンはその男の子がだれか、すぐにわかりました。いじめっ子のダニー・ラッグです。

ナンはペッパからすべりおりと、ダニーのそばにいつてたずねました。

「じょうばけん乗馬券は？」

「そんなもの、知るかよ。おれたち、友だちじゃないか。ただで乗ったって、かまやしねえだろ？」

「わたしたち、友だちなんかじゃないわ。それに、だれだってみんなとおなじように、ちゃんとお金をはらわなくちゃいけないのよ。ロックスウェルさんが決めたことですからね」



「なんだい、おまえたちふたりは、ただ乗りしてるくせに！」ダニーはつつかかっていきました。

「わたしたちは、^{はたら}ここで働いているんですもの」ナンも負^まけていません。

「そうかい、ボブシー、ひとりでいい気になりやがって！　こんちくしょう！」

ダニーは、フロシーを乗せておとなしく待っているカップケーキに近づくと、いきなり、力まかせに、小馬の横^{よこ}つ腹^{はら}をなぐ